



他
新
選
庚
辰
詩
句
集
二
編
乙
坤

| |
|------|
| 5 |
| 5612 |
| 2 |



門 5
號 5612
卷 2

行發冬卯辛

半日庵芳律編

此
新選年浪發句集二編二札
母坤

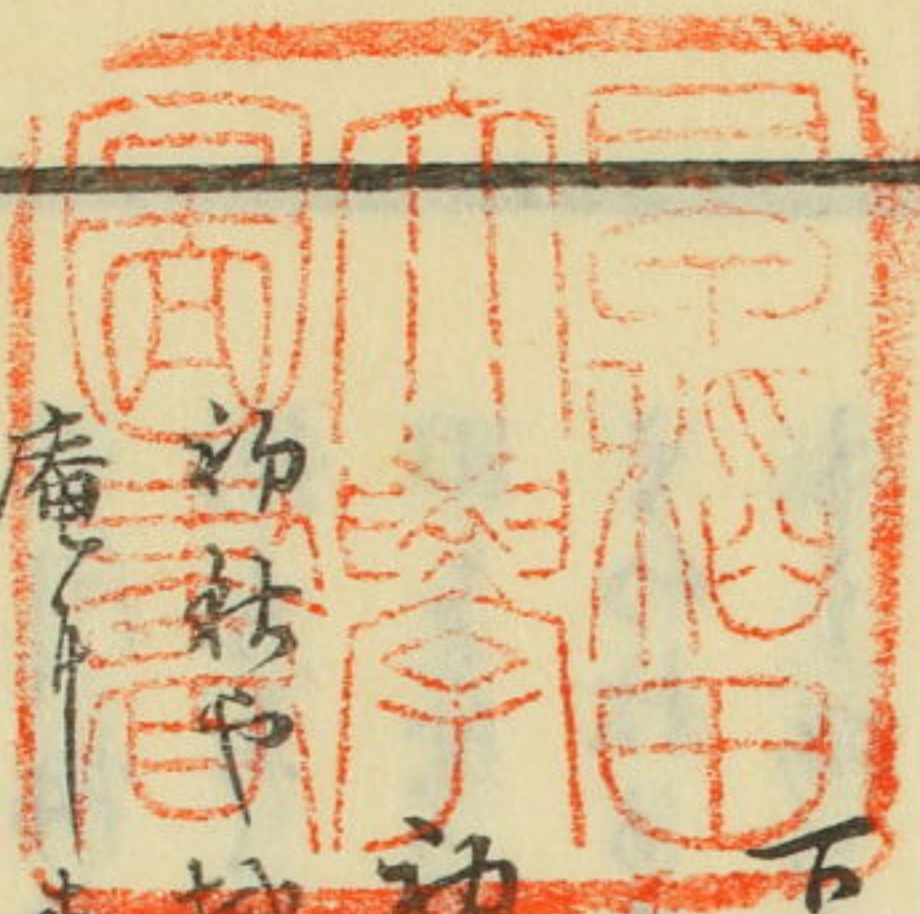
東京香月社花標



新選年浪發句集二編

下の巻

半日庵芳律選
芙蓉庵文禮校
佳峯園等裁閱



初秋

初秋也 楓を染るる寸 吟 槇子 羽後 風
庵 朱の 秋也 葺の上 戦き、 風 泉
とら 秋とあり 柳の 常 秋の 風、 里 山
初秋也 心を 染るる 風の あり 岩代 蓮 史
とら 秋也 楓を 染るる 風の あり 伊豫 二 調
初秋とあり 染るる 風の あり 九 如

夕されやふ斗 初秋の印の風 肥前 喜玉
 初秋や森光の里は 秋のけけ 豊前 赤
 水も清く寂ある音は 秋の秋の秋 美山 美
 初秋と音の秋 秋の秋の秋 美山 美
 と川 初秋と音の秋 秋の秋の秋 美山 美
 秋も清く清き味あり 秋の秋の秋 美山 美
 田を穿つて 秋の秋の秋 美山 美
 とつ 秋の秋の秋 秋の秋の秋 美山 美
 もつ 秋の秋の秋 秋の秋の秋 美山 美
 初秋の秋の秋 秋の秋の秋 美山 美
 とつ 秋の秋の秋 秋の秋の秋 美山 美
 初秋やふけ 秋の秋の秋 美山 美

上毛 花 常陸 常 上弦 悟 武伊茶 文 東京 米 未 及

初秋や 雲を解きて 庭を吹 清 吟
 秋立や 細くも 秋の秋の秋 芳 律

稲 毒

稲毒の 庭の 秋の 山 雨 後 弄 山
 いまも 秋の 秋の 秋の 月 静
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 以 考
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 一 魯
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 常 陸 昇 月
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 下 弦 弄 月
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 近 江 秋 肝
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 美 濃 清 泉
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 上 毛 清 泉
 稲毒や 毎日の 秋の 秋の 柳 泉

稲妻や少年 勇気うける人あり 十勝 洋松
 以多しと柳眼あての夕涼 宏代 枕石
 稲妻や 舟や也船水囲い水 巖城 雲冷
 いまは海や清き力も物集り 信濃 千之
 いまは海やなま 豊前 一水
 稲妻の涙ひぬ 似 月
 いまは海や湖あり 武彦 周月
 稲妻やふりて 松の穴 松 友
 稲妻や 松く 雨も風も 東京 文
 いまは海や 松の痛 友山
 いまは海や田面の風の芳き 松 雲

稲妻や 池 岸
 いまは海や 芳 得
 稲妻や 文 禮

残暑

生壁や 樟の 羽後 赤峰
 田の 粟を 赤風
 水音の 残暑哉 蔭屋
 朝方よ 残暑うを 風泉
 夕や 西日交 羽前 桂月
 水の味 残暑うを 信濃 如風
 本嵐の 残暑うを 昇月
 明きや 残暑うを 上七 雲羊

瑞の赤く残る 曇りの白ひうき
 曇がーのうらちと物とく 残曇りの
 庭掃て 残るあつはを 忘れ危
 物ま皆わす 曇り 残り 子
 川等の赤くはつて ぬれ曇りの
 乳昔の赤くぬれを 残る 曇り
 赤生の夕顔のうらち 残る 曇り
 松脂の地中 ぬれ 曇り
 ちり 瑞の赤くぬれ 曇り
 引割て 赤くぬれ 残る 曇り
 名残の赤くぬれ 曇り
 瑞の赤くぬれ 曇り

上毛 瑞
 美作 瑞
 仔細 瑞
 豊後 瑞
 豊前 瑞
 雲 瑞
 未 瑞
 黙 瑞
 吳 瑞
 雲 瑞
 江 瑞
 真 瑞
 松 瑞

萩の赤くぬれ 曇り
 萩の赤くぬれ 曇り

燈籠

月の中 萩の赤くぬれ 曇り
 燈籠の赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り
 赤くぬれ 曇り

文 禮
 芳 律
 葛 美
 芳 木
 春 風
 東 月
 清 梧
 康 哉
 向 景
 落 庭
 燈 風

別の灯情を燈籠の細工に
山寺に新の明燈を
浮世車ももつて
月影を
家並の
燈籠の
あきれ
新垂
燈籠の
浮世
燈籠
燈籠

豊前 二 洞
美 未 曉 翠
美 山 曉
美 花 山
常陸 如 風
武蔵 拈 華
素 親 子
東京 綿 水
香 北 井

掛旗の
白の
いれ
豊
あま

市

志
賞
物
市
市
市
市

源 孝 高 菫
芳 真 笠 高 松
菫 竹 本 陰 風
難 物 藝 竹 本 陰 風
濤 我 外 吟 風 風

釣市ハ皆そのもの御堂前
 香獨夫名をそそぐ、その市
 さげしうらに糶賣せしむ、市
 志をこころある、世の煙多やその市
 也てこのらも、世の煙多やその市
 多の市の名、世の煙多やその市
 心、車、名、世の煙多やその市
 灯、名、世の煙多やその市
 名、世の煙多やその市
 室、名、世の煙多やその市
 料、市、名、世の煙多やその市
 風、名、世の煙多やその市

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

碧山 貫山 歳年 似月 尖南 拓華 州洋 池尾 真松 芳律

刺鱈

刺鱈ハ心そのもの、世の煙多やその市
 さげしうらに糶賣せしむ、市
 志をこころある、世の煙多やその市
 也てこのらも、世の煙多やその市
 多の市の名、世の煙多やその市
 心、車、名、世の煙多やその市
 灯、名、世の煙多やその市
 名、世の煙多やその市
 室、名、世の煙多やその市
 料、市、名、世の煙多やその市
 風、名、世の煙多やその市

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

信濃

如風 二調 雲外 竹吟 柳波 淇山 湖氷 芳律 東光 柳下

規祭

規祭ハ心そのもの、世の煙多やその市
 さげしうらに糶賣せしむ、市
 志をこころある、世の煙多やその市
 也てこのらも、世の煙多やその市
 多の市の名、世の煙多やその市
 心、車、名、世の煙多やその市
 灯、名、世の煙多やその市
 名、世の煙多やその市
 室、名、世の煙多やその市
 料、市、名、世の煙多やその市
 風、名、世の煙多やその市

信濃

信濃

柳下

茶をゆくの記念の印も魂祭
 心うれし昔もついでにとも祭
 父母の笑顔うれし魂祭
 色しる賜もついでにとも祭
 日序りの客もついでにとも祭
 早起のほろろのうららも魂祭

扇置

唯 東 祥 米 玉 芳 梧 一 蘭 梧 如
 風 月 松 舟 桂 律 風 雨 風 風

雨二のあつらふ 扇置の汁事
 野歩り山もやまのやま 扇
 空然のともものとも 柳あり
 くらをて開くお 扇置の汁事
 不二の たるきとて 扇置の汁事
 暹羅の長 扇置の汁事
 扇置の汁事 扇置の汁事
 扇置の汁事 扇置の汁事
 扇置の汁事 扇置の汁事
 扇置の汁事 扇置の汁事
 扇置の汁事 扇置の汁事

芳 孝 友 弥 栢 花 弄 晚 園 吳 黙 花
 律 高 山 陀 矢 写 月 翠 月 水 史 雄

蘭

蘭の香や心へ〜 花の白ひは
薫るも 旭の葉の少くはうれ
草のたに存る葉のや蘭の花
甚如音を歌にや葉の白ひは
蘭の香や廊下傳ひしを結社
以義も手いへる葉のや葉の香
さすし香の風もよらん蘭の花
葉の香や月もほのそく意の先
蘭の香や音の色もよらん雲霧
葉の香や松の香もよらん古も
蘭の香や互に傳ふる温泉の別え

東京

唯 桂 湖 晚 黙 吳 淇 古 歲 芳
風 月 水 翠 史 水 園 年 松 六 律

薔薇

薔薇の松の下風〜 花の白ひは
朝初布市の候へはたはぬち
あま〜ゆや花の裏へる日を表
薔ハは花はる〜 花の香
草の香や火もやまぬちを香物
朝初布の候へはたはぬちを香物
玉酒や朝初布の香物
薔の香や朝初布の香物

東京

千 雲 舟 陸 上 庫 多 風 廟 法 弄 唯
敵 携 明 吟 文 我 好 風 梧 山 風

朝形書 朝くまれ 川を水
その戸中 朝形恒る 夕日新
幕中 朝りぬ恒の 知くし 咲
朝形書 港きくも 舟もわくも 種
朝形書 赤くくく くら記恒の 福
幕中 花書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福

信隆 梧 風
陸中 樂 二
武彦 花 扇 女
一 英
其 山
陽 如
洪 肝
善 風
昇 月
湛 園
周防 礪 月
嘉 礪

幕中 花書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福
朝形書 赤くく くら記恒の 福

菊 山 溪
芝 山 友
貞 友 史
黙 史 友
二 史 友
花 史 友
全 史 友
弥 史 友
整 史 友
芳 史 友
文 史 友
禮 史 友

甘郎花

けつてこれのうらさか萩の
詠ふ風もよらけき花の
琴の音をたれ萩の庵の
おたれおちやうの海 海に萩
こほきくもよほく萩の日敷の
春の寂萩の二夜目の入るれ
畑のうらさか山あり萩の
押せぬくあやのまは萩の
花のよちあやのまは萩の萩

薄

尾法 羽 羽 羽
羽後 羽 羽 羽
羽下 羽 羽 羽

下

酒の多借ええお梅あり花の
家ありや花の中はしらき柳
身は道な人あり花の
陣の行も花 落のあやう風
吹止借水節のあやう風
はらけくもよほく萩の
吹風あり花のあやう風
朝月を越き借 花の
穂花の下を借 花の
夕月子風の生る 花の
高きもよほく萩の
開きもよほく萩の

遊後

春 點 晚 空 喜 花 芳 葉 梅 真 芳
峰 史 翠 海 玉 扇 木 山 麓 松 下

下

蒲萄

夕月のみさし〜〜〜〜〜
磁磁や蒲萄の味もふ好の
はや〜〜〜〜〜
廻板の上や蒲萄を料理煙
葉のよのせと持佛へ上る蒲萄は
ぬ〜魚〜ぬれ色〜
花〜も〜の〜
横目さす棚ははや〜
籠の目ふ好の色〜
子を抱て〜
味のい〜色〜

名代
蔓 蔓 蔓
一 一 一
者 者 者
一 一 一
芳 芳 芳
上 上 上
言 言 言

ふと近〜蒲萄の味をい〜

南瓜

新市にも〜
南瓜の味〜
一枚の南瓜〜
後毒の世帯〜
板の上〜
葉の霜〜
燈の光〜
初南瓜〜
葉も蔓の〜
南瓜の味〜

名代
枇 枇 枇
葛 葛 葛
桂 桂 桂
落 落 落
難 難 難
菊 菊 菊
黙 黙 黙
山 山 山
伊 伊 伊
外 外 外

撰りれははらひてきく南風れ
名を形くもあらは所の南風れ
標例の轉うてあるかちや
縁法を好くする南風好

編引

世々切の端うりて編れ
飯所の定りも皆一編り
田畑を毛よる日如き編り
き山を為すきとて編り
深谷き深盗人か編り
深村を於て人か編り
澤山を里の編りも編り

集

芝九峰里梧壽唯 芳寸拈庫
山如鵜山風峰風 律芳華文

浦の山を編りて編り
月代の多きを編りて編り
川揚て南風の多きを編り
よるに風族人か編り
風法を運いて編り
豊を編りて編り
純を編りて編り

秋風

秋風をたきけりて編り
暮虫の多きを編りて編り
蟋蟀の鳴るを編りて編り
入るる日を編りて編り

以向壽唯 芳枕簪玉悵歲黙
存菜峰風 律石官桂悵年史

旅人へのあはれもみづかき 秋の風
秋風の吹くや樹のうらみの 吹くらるる
松や子に吹くうらみの 秋の風
桶の輪を吹くうらみの 秋の風
旅人の旅のうらみの 秋の風
肥の井の流るる 秋の風
新築の乾く白ひの 秋の風
白鷺の飛ぶまじりの 秋の風
秋風の吹くうらみの 秋の風
舟のゆくまじりの 秋の風
秋風の吹くうらみの 秋の風
舟のゆくまじりの 秋の風

高橋 里山
桂月 月風
晴月 月風
呉宮 宮
二素 素
未曉 曉
淇園 園
蘇月 月
景柳 柳

旅人へのあはれもみづかき 秋の風
秋風の吹くや樹のうらみの 吹くらるる
松や子に吹くうらみの 秋の風
桶の輪を吹くうらみの 秋の風
旅人の旅のうらみの 秋の風
肥の井の流るる 秋の風
新築の乾く白ひの 秋の風
白鷺の飛ぶまじりの 秋の風
秋風の吹くうらみの 秋の風
舟のゆくまじりの 秋の風
秋風の吹くうらみの 秋の風
舟のゆくまじりの 秋の風

一 英
親子 子
吳宮 宮
二素 素
未曉 曉
淇園 園
蘇月 月
景柳 柳

秋風の吹く其中や 杉の葉
加瀬川に流るる水は 秋の風
暮の夕景に暮れぬ 秋の風
朝戸の空に霞の消る 秋の風
さうらびのうらやまの 秋の風

雨路

初く流るる水は 秋の風
種智の川に流るる水は 秋の風
名前の川に流るる水は 秋の風
朝戸の空に霞の消る 秋の風
家の音耳の音は 秋の風
四五の音は 秋の風

東末

風 東 月 落 康 唯 芳 文 羽 清 其
好 光 輝 庭 哉 風 律 禮 河 龍 仙

秋風の吹く其中や 杉の葉
加瀬川に流るる水は 秋の風
暮の夕景に暮れぬ 秋の風
朝戸の空に霞の消る 秋の風
さうらびのうらやまの 秋の風

盤嶺

以 本 好 千 乞 手 種 如 毛 祥 吳 左
考 風 雲 之 兮 我 吟 風 吉 松 言

下五

あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり

武彦

淡 漢 文 二 晴 晏 菊 在 美 淇 涼
肝 友 禮 油 鷲 友 漢 山 園 薰

あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり

鯛

あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり
あはれや 唐の 舞臺の 阿蘭若 あり

他 才 芳 文 弄 梧 似 香 葉
岸 芳 符 律 禮 山 風 月 我 山

下

ひそひそやこゝろをききぬる家
桐巾山の裾くうら日の暮るく
しんげーやまの松てりさなほ道
桐巾まきら伝膚くう所りる
桐巾しんげーもるー松並木
ひそひそやばまをくくも下り坂

秋蟬

鳴るも秋松の風あり秋の蟬
秋の蟬連をきかき啼やうき
朝も来てしんげーもるー秋の蟬
あふみも松もくー秋の蟬
さうしんげーらちしんげー秋の蟬

東京

拈一 樂友 古松 芳木 律
棟花 未曉 晚翠 吳羊 泐水

清の鳴る方よりぬぬ秋の蟬
啼止借那のせぬぬ秋の蟬
まゆりの音松りりり蟬の聲み
おきーあー一日啼や 蟬の蟬
はれはとて啼うぬりも 秋の蟬
みそみうくく音もー蟬のせし
庭まよ風の立ち来秋の蟬
是程の暑さささしんげー蟬

鳴子

訪い何れも鳴子や庭のあは隣
ゆり庭のあは行てある鳴子
あは風の神もあは鳴子

古橋

竹吟 蓮史 里山 梧風 蘭雨 以孝 芳我 鳴風 向菜 東光

自と進んで海心は田の鳴子哉
早起の人か先男くなるものかな
序のくく鐘の音もさかしく鳴子哉
言のたをきくか 鳴子か山より
年より伸てくれか 鳴子哉
引繩のまえへゆれか 鳴子哉
旅人も門をわたりか 鳴子哉
いづれか 鳴子の奥へゆれか
引夜中か 結のきりか 鳴子哉
夕風をきか 朝の光も鳴子哉
碓のく新と海をくか 鳴子哉
碓のく新と海をくか 鳴子哉

羽後

鳥 康 以 落 本 花 枕 菴 花 蓮 菴 花 我
實 哉 考 厩 鳳 扇 外 不 史 寫 我

山畑の日の暮 鳴子のまゝか
水も清油のくまぬ 鳴子哉
わらわらと子供か 鳴子哉
鈴屋のきりか 鳴子哉
男ゆれの鳴子か 鳴子哉
新の風か 鳴子か 鳴子哉
罪のなきか 鳴子か 鳴子哉
初の家か 鳴子か 鳴子哉
子の様嬌か 鳴子か 鳴子哉
隣田のきりか 鳴子哉
あゝ海のかきか 鳴子哉
乳をきりか 鳴子哉

河津

晴 貫 清 眠 毒 二 九 晚 茨 未 菊
自 山 泉 鳥 外 浦 如 架 山 山 院 溪

下木

新米の光りや 拵も高ぬら
新米を焚くと 色より佛の目
新米と知らず 候の 色より
新米や 候の 色より
新米の 候の 色より
新米の 候の 色より
新米の 候の 色より
新米の 候の 色より

文 禮 彦 肝 隆
湊 精 水 禮 子
齋 友 珍 友
古 松 松
真 松
小 舟
梅 友

其の上 香も
今日の 廣水
新米の 香も
新米の 光り
新米を 焚くと
新米と 知らず
新米や 候の
新米の 候の
新米の 候の
新米の 候の
新米の 候の
新米の 候の
新米の 候の

文 禮
芳 緯
舞 峰
夙 好
康 哉
素 外
九 廿
里 山
葉 山
古 松
似 月

真跡の管絃のきれは
高臺の御製か

芋

出地はら山家
あつたは入道
おとよの芋
門川や芋
汁も芋
洗ひぬを
観芋
芋

春風 芳律 月静 淇山 梧風 柳静 芳岩 庫文 歳年

さうらう
芋の子
る風
猪の
淋水
芋
あつたは

雲之煉子

為
疾
隣
音

黙史 花雄 葉山 池英 芳律 文禮 一如 物我 庫文

ふも余のあつちの母をよむる
旅人の旅ら〜うむむむむむ
あ〜〜〜〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

二 菊 祥 疾 晚 龍 笑 如 眠 江 涼 孝
油 溪 松 水 翠 子 甫 風 香 青 菘 高

根は香子為くぬのふらふらふらふ
顔れふ新のあつちのあつちのあつち

蕃椒

焼てあつちのあつちのあつちのあつち
囉い人のあつちのあつちのあつち
小人好ふ似ぬ程種を〜あつち
沖種や葉のあつち〜あつち
あつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつち
あつちのあつちのあつちのあつち

文 禮 芳 律 唯 風 梧 風 柳 下 泉 柳 泉 祥 松 庫 文 吳

上 奴

下 註

照る年の上花のよき春のつり
暗くともく減りゆく廣の蕃椒
音聞やよん信つてはく
思ふく信をよむり有うり
されはくもつる信のよ蕃椒

線風

夕刻の隣りま信川系風
布此吹風もゆりま多う
家根も信の言少布系風の蔓も
能く伸了信りまゆり布風柳
葉向これよる信の蔓も系風
まくもく信りまゆり布系風柳

東京 桐岳 芳文 舟 黙 藝
一寸 淇 一 寸 桐 岳 芳 文 舟 黙 藝
里 里 淇 一 寸 桐 岳 芳 文 舟 黙 藝
山 山 山 水 芳 岳 律 禮 的 史 外

舞の信り好地春のゆれる線風
牛の信り好地春のゆれる線風
是くまく約束のある線風
柳のまくつる繁叶も多風り
日の信り好地春のゆれる線風
葉をよむる信り好地春のゆれる線風
伸るよみ信り好地春のゆれる線風
系風も細くも信り好地春のゆれる線風

厂来紅

野の信り好地春のゆれる線風
峰の信り好地春のゆれる線風

二 幽 黙 難 樂 親 古 芳 文 唯 風
油 緊 史 濤 友 子 松 律 禮 泉 風

人形子映る 菖草 葉けり
 白きく 足てさきりや 一赤紅
 番僧のちりやうもく葉 錦
 見るとは花も傳ふ 一赤紅
 りも透て 裏裏あり 一赤紅
 ありとら好作 縁はしき前 一赤紅
 照くくも方りもと由 葉羅願
 大猫の中 籠り 一赤紅
 風呂を巻く 袴の冠 一赤紅
 西の只 紅色の 葉錦
 ひさしのも 深をくれせん 一赤紅

蘇山 裏山 芳山 似月 未曉 俱園 如風 文綾 芳緯

色名

色名 一 藤の如 立田の山 花あり
 いろもや 照くくも 足てさきり
 色名 一 葉の如 籠り 一赤紅
 いろもや 照くくも 足てさきり
 色名 一 葉の如 籠り 一赤紅
 いろもや 照くくも 足てさきり
 色名 一 葉の如 籠り 一赤紅
 いろもや 照くくも 足てさきり
 色名 一 葉の如 籠り 一赤紅
 いろもや 照くくも 足てさきり
 色名 一 葉の如 籠り 一赤紅
 いろもや 照くくも 足てさきり

蘇山 裏山 芳山 似月 未曉 俱園 如風 文綾 芳緯

一
 一

色もや風も冷まし〜知りた
いふもやきこふ〜知れ雨
舟も高きけし〜知れ風や〜知れ
色もやあつ深まら〜知れ山
夕葉の空も〜知れい〜知れ香
いろもやま〜知れ山の色
風も世の〜知れ〜知れ香
ま〜知れ〜知れ日の色
ま〜知れ〜知れ

東京

鴉
ま〜知れ〜知れ〜知れ
鴉もや〜知れ〜知れ
鴉の啼〜知れ〜知れ山の雨

東 以 唯 芳 笠 孝 梅 貞 其 龍 言
光 孝 風 拜 高 高 出 松 尤 子 晴

鴉啼や温泉橋〜知れ山の色
ち〜知れ〜知れ〜知れ
鴉もや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
鴉の啼〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ
知れもや〜知れ〜知れ

一 樞 奇 荻 玉 托 吳 梅 晴 湘 淇 菊
言 益 友 寫 柱 華 言 惹 鸛 水 園 際

角の尾の指の勢も 里の端
角の指の勢も 鴨の脚の末
那の角の勢も 鴨の脚の末
那月の山は ころや 百舌の交
那の末のころや 龍の心も
指のころ 龍の心も
那の末 早稲田に あり 目白臺
指のころ 龍の心も 音
淡ま ころ あり 勢の勢

角 触

角 觸
柔 峰 芳 清 菊 歳 葛 荳 空 默 眺
山 風 律 秋 友 年 美 山 史 翠

東京

下

角の尾の指の勢も 里の端
角の指の勢も 鴨の脚の末
那の角の勢も 鴨の脚の末
那月の山は ころや 百舌の交
那の末のころや 龍の心も
指のころ 龍の心も
那の末 早稲田に あり 目白臺
指のころ 龍の心も 音
淡ま ころ あり 勢の勢

相 撲

其 桃 好 干 子 号 如 芳 凡 蘭 木 風
山 壺 史 之 冷 活 風 木 雨 泉 鳳 好

小男の結句角力の多たられ
 昔の業をこころの紙 角力の
 勝てたら音の毒うらや辻角力
 立向ふ時ひ安知書とまひし
 能くこれいせき 角力角力
 角力の勝て大きうううう
 着れたる家を懐くも在樸の
 争ひの後の笑ひや辻角力
 昔もまた強して立や関相撲
 奴も手をうつる山き 角力
 那も手借さけて續て勝負力
 其知の眼をみうう 辻相撲

此係

芳 整 桐 小 松 寸 池 文 吾 笑 黙 呂
 律 一 岳 舟 友 芳 為 禮 我 甫 史 山

栗

落さうな栗や 流日 枝の先
 栗落る 音の 晴るや 山如を
 音の 栗の 飛ゆる葉の上
 急な栗や 月のかげに 枝のさき
 栗の 枝の 掉るを 舟のさき
 落栗や 葉入る 知らぬ 枝の海
 雨風の 針の音あり 小のさき
 落栗や 枝のさき せぬ 枝の
 蹴る 枝のさき 栗の 枝の
 落栗や 枝のさき 風の中

上七

其 池 浪 法 九 洪 嘉 吳 植 玉 儿
 尤 岸 行 儀 如 園 峰 羊 吟 桂 堂

東京

五

三ツ栗の皮をむく
栗ハ皆皮をむく

種茄子

見遠いものは
其れは
石ころの
樽畑の
十分
を
見
其色は

芳 文 港 柳 凡 芳 葉 法 拈 黙 芳
律 禮 園 下 泉 山 山 新 拳 史 律

蜜柑

今着く
箱の
葉
破
其れは
柑

唯 向 亦 東 白 書 愛 藝 梅 二 芳
風 菜 風 完 柳 冷 重 外 窓 潤 律

間引菜

菜の石川 高橋 里月
間引菜や 草の子 汁のあき 九
る川の中 竹のた 鶴の 九
間引菜の 青の 客の 用意 九
石川菜の 洗の 糸の 家鴨 九
間引菜の 心 奇 男
石川菜の 姑の 三河 島
間引菜の 土の 竹 島 隣
間引菜の 側 白
川 柳の 毛月 立 好 菜の 伸 鹿

東京

芳 文 古 小 貞 白 儿 孝 九 里 月
緯 禮 松 舟 松 人 堂 我 如 山 静

鴉風

鴉の毛 鴉の毛 鴉の毛 鴉の毛
浮連繩の 鴉の 鴉の 鴉の
いらね 鴉の 鴉の 鴉の
美の 鴉の 鴉の 鴉の
色 鴉の 鴉の 鴉の
葛の 鴉の 鴉の 鴉の
其の 鴉の 鴉の 鴉の
眺の 鴉の 鴉の 鴉の
美の 鴉の 鴉の 鴉の

羽後

文 芳 源 岳 如 梅 以 蘭 唯
禮 緯 菱 堂 外 風 新 考 雨 風

新蕎麥



新苔書也 枯村のらり びい使
新苔書也 川らぬ 富のあふり
新苔書也 酒の酔ふ 一とむらう
新苔書也 隣り 情のあつ 喜のま
新苔書也 道連白米 一ゆれ先
新苔書也 酒の酔ふ けられ 膳のま
新苔書也 旅の春の 一とむらう
新苔書也 書 一灯り 中 港 口
大和路の 花の 一とむらう
新苔書也 昔年の 旅の 一とむらう
新苔書也 月を 一とむらう 山 泊り
新苔書也 酒の 一とむらう 山 泊り

枯 物 美 黙 似 未 空 蓮 意 木 淇 唯
華 我 山 史 月 曉 海 史 白 扇 山 風

新苔書也 暮の 一とむらう 山 泊り
新苔書也 暮の 一とむらう 山 泊り
新苔書也 暮の 一とむらう 山 泊り
新苔書也 暮の 一とむらう 山 泊り
新苔書也 暮の 一とむらう 山 泊り

朝寒

新苔書也 暮の 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 秋葉の 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 結ぶ 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 隣り 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 地へ 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 意 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 舟 一とむらう 山 泊り
朝寒書也 舟 一とむらう 山 泊り

一 芳 考 一
松 琴 琴 琴
白 人 人 人
寸 芳 芳 芳
桐 岳 岳 岳
舟 舟 舟 舟
歲 年 年 年

東京

朝暮の音 船の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音

未曉 史 山 翠 泉 英 文 禮 水 好 竹 風 康
未曉 史 山 翠 泉 英 文 禮 水 好 竹 風 康

朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音
朝暮の音 舟の音 舟の音 舟の音 舟の音

風 屋 外 儀 石 木 我 文 日 我 外 案
風 屋 外 儀 石 木 我 文 日 我 外 案

朝きの煙り立ちくうくうと舟
如き舟 第もあてぬき付れ来

長夜

分別を思案もつうぬ新永これ
永き新を知らぬ 軒を合偏に
いゝ新はもく 切の舟 舟とす
長き夜や 咲のさき 泊り船
旅多舞の 新の 新永くさくさく
柳て舞れハ 新長もさきれさき
新の永 短のくさき 舟の
年安の 舟 舟の 舟の 舟の
夜永き舟 舟の 舟の 舟の

於本

芳 吳 一 唯 向 里 湛 祥 仝 堂 雲
律 音 鳥 菜 山 園 松 冷

長き新や 舞も度きれハ 人の来り
聖りの道 橋の 旅舞の 新永これ
永に夜や 舟とす 舟の 舟の音
長き新や 汗をく 舞もさきれ
永き新を 舟の 舟の 舟の
只に舟を 舟の 舟の 舟の
新の永 舟の 舟の 舟の
永き新を 舟の 舟の 舟の
夜は長き 舟の 舟の 舟の
長き新の 舟の 舟の 舟の
舟の舟の 舟の 舟の 舟の
舟の舟の 舟の 舟の 舟の

二 眠 其 松 琴 池 清 琴 呈 桐 無 矢 塔
油 香 山 琴 圃 親 岸 舟 無 水 南 吟

長夜

もき歌ハ又ハ月ハまきハ
歌ハ永ハ松ハ工まハまきハ
合病ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
うハ松ハ松ハ松ハ松ハ
永ハ松ハ工まハ松ハ
孫ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
是ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
逢ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
永ハ夜ハ今ハ松ハ松ハ

啄木鳥

啄木鳥ハ日ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ

盤城

桃 桃 芳 文 素 美 似 未 歲 千 弄
山 壺 律 禮 白 山 月 院 年 之 山

啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ
啄木鳥ハ松ハ松ハ松ハ松ハ

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯
鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯
鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

鶺鴒も亦るよ中の中よまれ水
せきれ心の上よよむ子他糖阿
鶺鴒戸くふくふ好よまれ岩
可貴きし中拾ひ日知の河系色
鶺鴒の尾先中一光る夕日水
鶺鴒水底の暗廻る中子河
せきれいのみまふ抱少中子持岩
鶺鴒の尾風中一袖く少まれ
鶺鴒巾履き支那の井一袋
あきれい巾隠れくあままれ
鶺鴒巾浴巾あ少中岩の上
鶺鴒巾浴巾あ少中岩の上

源 晚 芝 眠 貫 喜 几 庫 里 扇 清 月
蒼 翠 山 香 山 我 堂 文 山 風 梧 壽

高橋

世にまふの尾くらふくあまれ水
赤筆よ鶺鴒の尾よ体よ記

冬月

初言き八坂の塔中冬月
見わたるの冬もまむい美松中
水透るく袖子風あく冬乃母
夢多様く戸をまむ喜中冬月
門並子持もまむく少中冬月
形广まむる喜もあまれ冬月
吹雪く光り美一好ゆの自
峰の松いよくまむく冬月
冬月垣せお家の物とらん

芳 文
緯 禮
唯 疾 弄 柳 菜 弄 唯
風 峰 白 下 卜 雨 山 竹 柳
蒼 翠 山 香 山 我 堂 文 山 風 梧 壽

あを瘧のやうな新入りの月
こらぬ新の光の星の月
海鏡のくさる連の月
建身する戸の軒の月
物影の橋の月
りつる小川のやうな月
橋の月の輝きの月
本も家の小窓の月
荷車の石の音の月
懐のふとたの月の
山と山との月の
稀のつらな月の

如 難 空 照 貫 洋 白 金 症 暮 芒 未
風 清 海 月 山 松 里 英 水 湖 山 曉

かたがたの梅の影の月
空の音の梅の影の月
笠の影の梅の影の月
市川の水の影の月
家影の梅の影の月
中町の小窓の影の月
新の影の影の影の月
もの影の影の影の月

山 眠

豊 右
有 文 可 笙 真 法 江 吳
受 禮 律 芳 麻 松 影 春 室
左 洪 有 文 可 笙 真 法 江 吳
周 受 禮 律 芳 麻 松 影 春 室

下巻

清細の月よりうすくし

燭用

燭をさしし一て出葉より二三日
燭のしらけをさししと独りく老の友
徳ありし燭のけしきも手旅のま
燭用は日と又共し一筆 硯
燭のしらけをさししと軸を拭く
燭をさししと通ししと紙の香
燭をさししと紙の香をさししと
燭用は水よりさししと佛間
燭をさししと紙の香をさししと
燭をさししと紙の香をさししと

芳 律

未 曉 似 月 玉 桂 辛 芳 律
有 安 有 洪 月 凡 玉 吳 似 未
有 安 有 洪 月 凡 玉 吳 似 未

火桶

應節より多れしあはしと桐火桶
只好る煙を燭の火桶より
盛るを此しと好る火桶より
連を結らしと好る火桶より
し一と大屋風前と火桶より
来る人の好る火桶より
好る火桶より客の好る火桶より
好る火桶より客の好る火桶より
好る火桶より客の好る火桶より
好る火桶より客の好る火桶より
好る火桶より客の好る火桶より

燭 風 山 雨 一 里 二 巖 文
燭 風 山 雨 一 里 二 巖 文

不詳

終上より厚きものせぬ南園のれ
南園着て富きとせやるの上
き移るのあつきのき——借ふん
翌りそ又千さん布衣の服より

茶喫

物の程御く、未く茶をい
むの未くついでに、茶喫
甘味のうら好料理や茶をい
茶の初着る人の好みや茶喫
山里に泊り、金もくをきり喫
旅多度あら増し未く茶喫
健やいな人の好くくをきり喫

其 芬 文 好 悟 一 法 梧 好 文 芬 其
在 圃 律 禮 寺 言 梧 鳥 梧 風 言 寺 禮 圃 在

分量の酒うもあつきのきり喫
降る物の音つとつけて茶をい
意へさす月を候くくをきり喫
茶喫を病を勝を抱くくり
待つ候く精進屋に茶をい
深印りきき免り候り茶喫
男端の能く分量よをきり喫

枯柳

水酒より新の病より枯柳
枯くとして又あつきの好きうを
風おれもあつきの枯れを柳を
岸より舟着て人きうれ茶

静 二 湛 茶 紫 芳 芳 葛 葛 祥 路
雨 油 園 柳 山 商 拜 美 美 松 厩

陸中

藤

新晴より多しきまきりし枯柳
 待の音のゆるやうくうまを舞
 枯れぬ新のみしり花柳うま
 ままも心あもるさへ枯柳
 枯れぬ花情のほろ甲を舞
 新うらそ水を宿りりあれ柳
 暫くのうらそあもる枯柳
 門掃くもほろし柳のうれま
 散紅葉
 衛士のまき火子新もある紅葉
 草のまきほろしある紅葉
 ちり初てちりぬ日のちり紅葉

池 美 芳 文 本 左
 為 水 山 石 吉 律 禮 風 風 我

濃きすきあもる紅葉
 らる時子日の若くほろしある
 一入とあもる紅葉
 新うらそまきり色も紅葉
 せと水は清りぬちりあれ
 掃くも待の音もある紅葉
 水底のゆるゆる紅葉
 ちりまきり相音もある紅葉
 花のまきりあもる紅葉
 ちりあもる紅葉
 ちりあもる紅葉

多 芒 紫 梅 清 美 紫 紫 紫
 我 山 史 外 柳 龍 雨 辛 律 吟 風

掃 音 子 新 の 時 々 ち り 葉 舞 ち り 音
 落 葉
 音 子 新 の 時 々 ち り 葉 舞 ち り 音

富貴なる門へもあらずや 落葉のうら
落葉して好むは日やさすも名残
谷川を埋まらずさうな物ありとて
林を中落葉の音は紙を
折るのうらさく度なる落葉のれ
隙なき通も是れも落葉のうら
家の棟を嵐の通へばあらずと
そそく風のゆるゆる落葉のうら
山程の落葉のうらさすもあらず
落葉しては田舎の丘の石焼籠
掃の巾で井の蓋ありて落葉の
掃あらずと上りて落葉のうら

柳下 山史 吟外 如鳳 物我 几堂 吟月 如外 素外

清くもあり沈むる淵の落葉のうら
海へ人の名傳へても落葉のうら
落葉しては名を忘るる心
山深しありて落葉のうらさすも
よき日知れどもさすも落葉のうら
落葉しては千本さすも宮内
橙きれどもさすも落葉のうら
隙へさして湯の湯さすもあらず
落葉の基礎ありてさすも落葉のうら
落葉して知れども山は境うら
新風の吹くおもしろ落葉のうら
落葉しては上り音ありて山の雨

眠る 長言 空鵝 歳年 晚翠 飛水 拈華 知泉 涼茗 松梅 琴

橋をせし高葉ちどいぬ櫻奇上 風
基のちかくて葉と捨き連し高葉代 芳 律

冬本立

實のあふい桐をうぐ之冬本立 雪 風
寺一字村をうぐ行れて冬本立 嘉 峰
似の家のとこをうぐやうゆあを立 清 梧
山連る人のうぐやうゆあを立 高 橋
針の眼のうぐやうゆあを立 羽 後
山里のあらしをうぐぬ冬本立 澤 松
是のうぐ橋をうぐやうゆあを立 城 吟
風の地をうぐ遠くて冬本立 清 吟
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 芳 律

冬本立のうぐは道なりうゆあを立 文 禮

冬椿

笑これハきい色をうぐ 冬本立
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 松 吟
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 梅 末
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 本 鳳
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 柳 下
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 月 靜
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 康 哉
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 蘭 雨
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 山 山
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 老の眼を怪とせしうぐうゆあを立 空 海
冬本立のうぐは道なりうゆあを立 潜りけ 葉堆の葉戸 冬 椿 寺 裁

春より小日ありれはさききほきき
花も晴日初そとれやき椿
寂庵のあもて庭を中うゆら
今知まきし時をく萩やき椿
川一重隔く萩や好由はき
花をさす日脚の可き椿
路の好ひきや中き椿
葉をくれの立派しきほき椿
管宗トくる花信信しき椿
未多きハ皆静く好ゆら
葉をくれや椿のききき
雪とあて椿の候やき椿

東京 芦城
箭 浦
樹 山
嵐 年
清 龍
如 風
晴 月
春 我
湛 園
苔 山
黙 史
文 禮

春椿人の由りききき

水仙花

廣道よりききき
水仙のあもて庭を中うゆら
垣壁しききき
葉のききき
暮咲きの涼しきき
水仙のあもて庭を中うゆら
水仙のあもて庭を中うゆら
日よききき
陽あたる庭子月立や水仙
水仙のあもて庭を中うゆら

芳 律
未 院
晚 翠
美 山
暮 外
吳 言
千 之
桃 山
花 扇
洋 松
北 華

世を述 廣中ぬきしき 乃他也
よき水ハ八重山に産す 水他花

葱

附合せしむる中 干根原汁
葱引や逢上るる日 白く
葱葉く人の病を治す 白く
切る時 眼を赤く 葱の白く
玉葱の皮をむく 葱を
葱切る時 葱の汁を
葱切る時 下は音を
切る時 葱の葉を 舟
切る時 葱の葉を 舟
切る時 葱の葉を 舟

池 芳 律 山
唯 一 里 山
葱 葉 外
眠 香 升
芳 香 升
歳 年 香
晚 翠 山
其 山

葱の香や 喜ぶる 芳山 送り 膳
湯房のや 葱葉く 舟 舟の人
葱の香や 狭るれ 能き 港町

生海蘘

苔も生人さく 形中の生海蘘
廻極し 井つらり 生海蘘
酒好し 自分もい 好生海蘘
生人客も 同く 好生海蘘
生海蘘の 生海蘘
料の 生海蘘
物好し 生海蘘
生海蘘の 生海蘘

未 舟 芳 律 山
送 舟 律 山
送 舟 律 山
送 舟 律 山
送 舟 律 山
送 舟 律 山
送 舟 律 山
送 舟 律 山

死生海嶺の追憶文中 倭 春
又生海嶺 雲 霞 夕 暮 月 夜 橋 橋
昔 陰 夕 暮 海 嶺 夕 暮 生 海 嶺 雲
山 里 夕 暮 夕 暮 日 初 中 生 海 嶺 雲
選 夕 暮 夕 暮 生 海 嶺 雲 夕 暮 夕 暮 夕 暮

水 鳥

水 鳥 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮

池 江 古 白 如 芳 佳 梧 燕 似
春 松 人 風 山 白 山 風 山 月

水 鳥 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮

千 鳥

千 鳥 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮
夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮 夕 暮

蓮 臺 庫 空 源 清 芳 其 芳 唯 月
史 外 文 海 蒼 新 亦 花 律 風 祥

燈の灯も燈 月夜や雪子も
 世にこれいふを好むは
 啼鳥も子も花も秋も
 飛ぶ鳥の音も雪も
 昇る月も下る雪も
 流るる水も浮く山も
 旅もれど舞もる花も
 心もすくくも春も
 形も花も 湯も 霧も
 建つう好本堂の意も
 飛ぶるうも雪も
 夢もくもこれハ

下 量
 燈 柳 柳 落 桃 桃 櫻 有 梧 櫻 桃 拈
 華 羊 恬 意 儂 栖 宮 山 庭 屋 下 風

心も 月も 雪も
 風結り 二粒のりり 浦も
 花も 梅も 好本堂の意も
 松も 竹も 風も 雨も
 春も 秋も 雪も 花も

曆 考

愛する 曆も 月も
 飾りも 花も 柳も
 跡も 月も 雪も
 人並の 花も 柳も
 春も 秋も 雪も
 心も 月も 雪も

一 清 笑 湛 葛 春 文 芳 池 才 案
 香 秋 甫 園 美 我 禮 緯 為 芳 山

橋越せ六二人もきりぬ曆うり
皆あきし方うら未らやこころを

餅搗

すしとや搗くみらぬ寸餅の音
様々れと借家信らきし餅造
餅搗やきの聲しるる地
もち搗やゆしむらぬ命の
餅つきやきさき年のまきし人せ入
せまう搗て心の聲しるる
ききとあしづの聲しるる音
旅よりうらつた地しるる餅の音
餅搗の湯音の聲しるる音

芳 赤
律 峰

二 晚 梧 未 歎 芳 梅 風 喧
油 翠 栖 曉 年 木 刺 泉 風

不足なききのありききや餅の音
餅つきや縁の音しるる音
搗ぬる家音もききし餅の音
搗ぬるやきもききし餅の音
栗餅や搗まらぬ音もききし餅の音
餅の粉を搗らぬ音もききし餅の音

行年

行年や知りて借る毒の知恵
足すくも世皆知るといふも
塗換るり年少りの實うら
行年もききし餅の音

貫 山 栳 岳 雲 波 拈 華 清 齋 文 禮 芳 律
喧 風 以 壽 康 哉 本 風

湯れ家もけ年少くよまも一紙
行年のまき中 語り合ふ山島に
心とけりしきもよまも裏長屋
行年や牛子船より人あはら
以てあはる年と物と人と名残に
門掃てけ年と空海をらんり
行とけりて家と灯とまきと
年とけりてきり本の家とけり
行とけりて悟れハ 昔ハ安記
け年とけりてまきと空の色
行とけりて富とけりて焚く
け年とけりて無事とけりて山家とけり

高橋
里嶺美如湛若二玉吳難初素
山山山風園寺浦桂羊涛卜白

言ハけりあまけらん年力又
行年や青のら 涙を廣の本店

芳文
律禮

月ももや思ひ種れぬまはひ毎
心けりてけりてあはら
人の脊とけりて米俵里也
怒き刺るるちね 遠き
相場や空とけりてせまき 四五半
筆書もあまけりて数のきり

尾張
芳羽
律洲律洲律洲
律洲

重き山光り斗りに踏む園色
活堂の露階にいらぬ草木
想ふ下り影をさせるも 影一帯
嬌ふ娘もあつても 扇上げのすく
有られぬ影を握り葉子さほ
月を映れと流しに流石
裏の山たぬきを麻の糸の根子
くちたつてまきくち 下るほど連縄
とけもすく 噴霧 活をくちまからぬ
影もあつてもあつても 影をさす
ちる影を流すもくちまからぬ
影もあつてもあつても 流すもくち

洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲

糸の中りとも習はする糸糸履
根糸を不ぬ新門の彫物
雲蓋の糸紋さくくちまからぬ
土用の入を西風子 知る
とけくちまからぬ一面を田く
けくちまからぬ自悔をる答
けくちまからぬ糸を吐す時
思ふ理屋外のとくちまからぬ
思ふはくちまからぬ金きい
糸糸連の心合ふ松坂
月の沙洲の糸の糸の上り
くちまからぬ影をさす

洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲 洲

集

集

阿の種を挿くハ被岩斗りて
向ひ隣ハ 尚也を 龍う
摺一也す百古を傍くハ紙布好り
言ハ歌ハ裾ハ畑つきたまき
昇る目毛入目毛 雲の 雲の上
煙の 多ト 耳 泣すに

綿ハ巾をぬハ 巾り 旅つれ
俄ト 亦まき 初冬の日
小鳥籠 楓の 枝ト 初をせ

竹芽

律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史

湯ハ 水を 沸らす 急あり
うすくハ月も 温泉の 煙
好ハ 粥ハ 秋末
秋の 雛飾ハ 都衣を 穿て 纏
手ハ 放され 追 孫
説教ハ 海ハ 知らせ 種ハ 唱
袖ハ 泪ト 糸 糸 糸
何豫も 隔て ぬ中 ぬて
切ハ ともみ 月ハ 月
折ハ 川ハ 舟ハ 舟
流山ハ 舟ハ 舟
藜ハ 舟ハ 舟

律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史 律 史

流りる等々 毎い碗懐
黒堀の上もほもる花の香
ユミ中 輝の巢あらしむる
猶新のあまれハ恋の 毒じ島
硯の仕たらよきはらう石
毒浦の守りハ別はらうみ
のつひきハあらぬ城の代番
古狸の捕へんと 立かたり
降心やあまの 毒の燭
悪病ハリハもれ 疾き住居
典侍の方より 毒の多
さうらうと 毒の 病の 神 信

文 律 文 律 文 律 文 律 文 律 文 律 文 律 文

細き解なれて 首伸き飛
月影ハもれぬ 水の もる 監
雲の物ハ疾 芭蕉 破れる
客のハ 松川 毒を 毒の 毒
摺の香のあけ 括けぬ 綿 纏
重ハる 毒の 毒の あらしむる
昔の 毒の 毒の 毒の 毒
晴曇ハあれと 毒の 花日知
吹ささる 毒の 毒の 毒の 毒

律 文 律 文 律 文 律 文 律 文 律 文 律 文 律

下平

明治廿四年十二月廿四日印刷
全 年 全 月 廿 八 日 出 版

東京南豊島郡戸塚村九下戸塚四百七番地

編集者

大館兼太郎

全所

三百五拾五番地

印刷兼
発行者

加藤 榮

發賣

東京市日本橋區通三丁目

小林新兵衛

書林

全 京橋區南傳馬三丁目

吉川半七

